

『長生殿』 訳注（十）

竹村， 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：教授：中国文学

<https://doi.org/10.15017/9604>

出版情報：中国文学論集. 33, pp.135-149, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』 訳注 (十)

竹村則行

凡例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『彙刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。
 - 塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九三三年）
 - 徐朔方校注『長生殿』（『人民文学出版社』一九五八年）
 - 曾永義『中国古典戲劇選注』所収『長生殿』（『国家出版社』一九七四年）
 - 蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
- 三 本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。
- 四 【曲牌名】に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、【ゴチック文字】の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。
- 五 訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。
- 六 訳文は、【ゴチック文字】で示した「唱」部分の訳出を含め、莊重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて

平易な日本文となるように留意した。「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七 前稿「長生殿」訳注(一)三、六〇九」は『中国文学論集』二六〇三二号(九州大学中国文学会、一九九七―二〇〇三年)に訳載し、また、同(四・五)は『文学研究』九十七八(九州大学文学部、二〇〇〇―〇一年)に訳載した。

八 本訳注(十)(第三十七―三十八齣)は、二〇〇三年一月―十一月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生は次の通りである。

河野 真人 ・ 王 毓斐 ・ 土屋 聡 ・ 有木 大輔
西田真理子 ・ 陣内 孝文 ・ 赤嶺 明乃

第三十七齣 屍 解

〔正宮引子〕「梁州令」(楊貴妃の靈魂となった旦が登場)私はゆらゆらと風に吹かれ、姿を留めることも難しく、どこへ行くかも分からない。生死の別れをした陛下とは離れ離れ、かの人はいなくなつたが、愛情は尽きず、恨みは止まない。

〔如夢令〕「陛下との比類ない風流事は既に終わり、薄命の私はこれ以上恨んだりはいしない。ただ、情愛の文字はどつしても消えず、私の心にしつかり嵌め込まれている。私はふらふらさまよい、ふらふらさまよい、夜明の月と風の中、^{〔一〕}一体誰を訪ねたものか。」私は楊玉環の靈魂、土地神が通行証を出してくれたので、風に任せ気ままに往き来できます。嬉しいことに、私は天にも地にも縛られず、ひたすら逍遙しています。ただ残念なのは、陛下の御前に参り、再びお目にかかることがかなわぬこと。(悲しむ介) 本当に悲しいわ。今日は風の吹くまま、どこへ行くのかしら。(行く介)

〔正宮過曲〕「雁魚錦」(雁過声全靈魂は風に乗る、ひっそりと夢のようにさまよつたが、行路はつす暗く、昼も夜も分からない。郊野の樹木にかりそめに宿れば、寒々とした霧の中に突然に^{〔二〕}塹の鳥が鳴き、私は驚いて、早くも留まるこ

とが出来なくなる。荒野に青い燐が光っているが、それに私の薄暗い行く手を照らしてもらおう。建物の屋根が雲の中に幾重にも重なっているが、ここは一体何処だろう。(見る介)おや、なんと西宮の門前だわ。中に入って見ましよう。(中に入ろうとする、二名の門神が、黒白の面と金色の甲冑を身に着け、鞭と鉾を手にして登場する)(高所に立つ介)「我らは生前は英雄として天下を安んじ、死後は神霊として宮殿の門を警護する者である。」(鞭と鉾を挙げて巨を遮る介)「この女幽霊だ、勝手に入ってはならぬ。(巨が通行証を出す介)私は楊玉環です。ここに通行証がございませう。(門神)これは楊貴妃様でしたか。今や安祿山が刺殺され、安慶緒は逃亡し、郭(子儀)元帥が宮殿を取り戻しましたが、上皇陛下(玄宗)は遠く西の蜀におられ、新天子(肅宗)はまだ北の靈武に留まっておられます。それで宮殿はひっそりとして誰もいなく、宮門はすべて閉鎖されています。貴妃様、どうぞお入り下さい。我らは下がります。(退場)(巨が入る介をする)ああ、「宮殿の花はどれを見ても断腸の思いがし、人影も無い部屋のカートンはさわさわ音を立てて床に垂れている。錦絵の屏風の合わさる処に行けば、紛れもなく、ここで陛下から結婚記念の金の釵と螺鈿の小箱を賜ったのです。」(涙する介)(先に舞台に以前の宮中のベッドや帷、調度品をしつらえておく)

「二犯」
「漁家傲」
「雁過声換頭」
「漁家傲」(ベッドに坐る介をする)「思えばあの日、黄金の釵と螺鈿の小箱を初めて賜り、陛下の深いご恩寵を忝くした。狂おしいほどの愛情を共に誓ったのに、(起つ介)「普天楽 馬嵬の乱で、こんなに急に離別するなんて誰が知りましよう。ああ、ほら、沈香亭や花萼楼も、みなひどく荒れ果てている。(楼に登る介をする)今やこの画楼に登る人は誰もいなく、池の蓮の花が二つ並んで咲くことも決して無い。」(雁過声)「また新曲が演奏されることは二度となく、まことに見渡す限りの荒涼とした風景に愁いが湧き、心は痛んで思わず涙が流れます。おや、ここが長生殿だわ。思えば、(涙する介)(先に舞台に長生殿の七夕乞巧台をしつらえておく)「こちらで私はあの日、瓜や果物を並べ、夜に香を焚いて乞巧の礼をしたし、あちらでは、その時、牽牛織女星に向かつて、陛下と肩を寄せて密かに祈りをしたわ。(哭く介)愛しい陛下、どうすれば一目だけでもお会いできましよう。さつき門神が、上皇陛下はまだ蜀におられると言っていた。では宮殿の門を出て、渭水の橋辺りまで行き、四川の方を眺めてみることにしましよう。(行く介)」

「二犯傾杯序」
「雁過声換頭」
ひとみを凝らせば、見渡す限りの秋の空。(橋に登る介)「漁家傲」寒々とした雲や遠くの樹々

の向こうに、美しい四川の峨眉山は見えず、「傾杯序」思ひ出しても辛いのは、都を後にした折、陛下が孤独でお疲れだったこと。病んだ馬に乗り、厳しい寒さの下、成都の万里橋のあたり、陛下はお元気でしようか。ご病気でなくとも、私のことできつとお痩せになったのでは。私は雲のように飛んで行きましょう。（空を飛び、風に吹きやられる介）（哭く介）おお、天よ、「雁過声」私はただ、靈魂の身軽さで飛んでゆけると思ったのに、山あり河ありの四川への道のりがこんなにも長く険しいものとは思ひもなかった。（見る介をする）おや、仏堂に空しく鍵がかかり、梨の樹が傾いている。何としたこと、風に吹かれ、私は元の馬嵬駅に吹き戻されたのだわ。（舞台には先に仏堂や梨樹をしらえておく）

「喜漁灯犯」「喜漁灯」夜の馬嵬駅はうら寂しく、灯火が一つかすかに漏れている。「山漁灯」仏堂の外には、陰鬱な風が四方に吹き、ほの暗い月光の下、うつろな厩舎を見れば、「朱奴兒」急に心が痛み、涙が落ちる。「玉芙蓉」軒先に茂るこの梨の樹に対すれば、（地に坐して泣く介）「漁家傲」こここそ、私が落命して遺体が埋葬された処。愛情の結末を迎えた処であり、佳人薄命の名を空しく留める場所である。「雁過声」在りし日、艶冶な美顔と千金の微笑を持つた美女が、今や白骨となって盛り土の下に埋められようとは。

思えば、天恩にそむいた私は死んでも悔いはないが、陛下との情縁はまだ切れず、心にかかり、永遠に忘れられない。

「錦纏道犯」「錦纏道」とりとももなく回想すれば、すべては夢中の儂い縁、花が散り、水が流れるように過ぎ去ったが、ただ二人の情愛のみは消え残っています。それはまるで蚕が死ぬ間際まで絲を吐き続けるようなもの。陛下は四川劍門関の離宮で愁えておられるでしょうし、私は馬嵬の夜の墓場を空しく守っています。二人とも恨みは同じく果てなく続きます。「雁過声」一体いつになつたら、あの黄金の釵と螺鈿の小箱に託した愛の誓いを完結し、七夕の夜の香を再び焚く日が来るのでしょうか。

（副浄が登場）「天界からの勅使が到り、冥界の貴妃の靈魂に伝達する。」（会う介）貴妃、天孫の織女様が天帝の玉旨を奉じて来られました。すぐにお迎への支度をなさるよう。私は先に参ります。（旦）土地神様に感謝します。（別々に退場）（雑が四名の仙女に扮し、水差しや旗を持ち、詔勅を捧げ持つ貼を導いて登場）

〔南四引子〕「生査子」玉旨が天界から降り、それを伝える使者の前後に鸞や鶴が舞い飛ぶ。貴妃に眞の愛情があることよって、彼女を天上の蓬萊宮へ召還することにする。

〔副浄が登場し、跪いて出迎える介〕馬嵬坡の土地神が織女様をお迎えします。(貼)土地神よ、楊貴妃の靈魂はいずこに? 速やかに連れて参れ。玉旨を伝えるほどに。(副浄)承知致しました。(退場)(幽霊の印である白布を取り去った旦を連れて登場し、跪く介)(貼が玉敕を読み上げる介)玉旨である。跪いて宣読を拜聴するように。天帝の玉敕に曰く、「それ玉環楊氏は、もと天界の太真玉妃であったもの、微罪により、暫時俗界に貶謫されたが、俗縁にまみれ、劫難に遭う必要はない。今般、天孫織女の上奏によれば、楊玉環は天に誓って後悔している由、罪業は既に消滅し、その眞情は憐れむべきものがある。よってここに、楊貴妃に太陰鍊形の術を授け、仙人の籍を復活し、蓬萊宮に住まうことを許す。欽しめよ、天恩に謝せよ。」(旦が叩頭する介)天帝に永遠の寿命あらんことを。(貼に会う介)織女さま、伏してお礼を申し上げます。(貼)太真、起ちなさい。昔天竺十載の七夕に、私が天の河を渡ろうとした折、そなたと唐の天子が、長生殿で密かに深く情愛を誓うのを見ました。更に先頃、そなたが本当に過ちを悔いていると馬嵬の土地神が上訴したので、私が天帝に奏聞し、この玉旨を戴いたので。(旦)織女様のお引き立てに心から感謝します。(貼が水差しを取り、副浄に渡す介)これが死者を復活させる魔法の液です。お前はこれを持って、貴妃の靈魂とともに墓前に行き、貴妃の元の身体に玉液を注げば、身体が復活し、上天することが出来ます。復活を遂げたならば、音楽や旗を伴って、蓬萊の仙院へ送り返しましょう。私は先に天帝へ報告してきます。(副浄)承知致しました。(貼)私は七色の雲に囲まれ、御車に乗って天宮へ帰って行きます。(旦)仙女を連れて退場(副浄)貴妃様、おめでとございます。では一緒に墓前へ参りましょう。

(副浄が水差しを捧げ持ち、旦を連れて行く介)

〔南四過曲〕「香柳娘」西の郊外、道路の北側へ行き、西の郊外、道路の北側へ行けば、一つの土盛りが見える。(副浄)着きました。(旦が悲しむ介をする)ここは私の、生前の美姿を埋めた所。(副浄)私は以前より泰山府君の勅命を奉じ、貴妃様の玉体をここに保護してございます。それを取り出しましょう。(舞台の退場口に向かい、雑の助けを借りて、旦の装飾で貴妃の屍体を扮装し、それを錦のしとねにくるんで登場)(副浄が錦のしとねを解き、貴妃の屍体を支えて立たせる介)(旦がそれを見て

驚く介をする（「あらん、私は元の身体のままのよう、あらん、私は元の身体のままのよう。両眼はしっかり合わさり、赤い唇は無言で閉じたまま（副浄が玉液を貴妃の屍体に注ぐ介）玉液が染み込み、貴妃の顔に生氣が差してきた。（屍体が眼を開ける介をする）（旦）麗しい瞳がちらつと動いたわ。

（屍体が手足を動かし、立ち上がって旦の方へ二歩あゆむ介をする）（旦が驚く介）ああつ、

〔前腔〕果たしてたちまち生き返り、果たしてたちまち生き返り、前に向かつて歩けば、姿形は私と瓜二つ。（ためらう介をする）ちよつと待って、この屍体の楊玉環が生き返ったとすると、私、靈魂の楊玉環はどこへ行けばよいのでしょうか。（屍体が急に旦の方へ歩き出し、旦が果然として屍体と相對する介）（副浄が手を打って声高に叫ぶ介）貴妃様、お間違いない、屍体は即ちあなたであり、あなたが即ち屍体なのです。（屍体を指さして旦の方を向く介）この身体はあなたであり、（旦を指さして屍体の方を向く介）この靈魂が屍体なのです。眞の性情と仮の身体が、現在は分離しているのです。（屍体が旦を追って舞台を急いで一回りし、旦が屍体にぶつかって倒れ、屍体はこっそりと退場）（副浄）ほら、貴妃様の靈魂が肉体に入つた、ほら、貴妃様の靈魂が肉体に入つた。まるで再び受胎したかのように、靈魂の玉環と屍体の玉環が合わさつた。

（旦が体を起こしてしっかりと立ち、おもむろに唱へ介をする）

〔前腔〕深い眠りからにわかに醒め、深い眠りからにわかに醒める。以前の私は久しく分離していたものが、にわかに身体と精神が再び合わさる。急に思い出そうとしてもぼんやりしたまま、急に思い出そうとしてもぼんやりしたまま。今の私は、夢に胡蝶になつた莊周のよう、胡蝶はどこにいるのだろう。私は楊玉環、思いもかけず今日屍体からよみがえり、遊離した靈魂と再結合した。心から天の配慮に感謝します。家を失つた旅人のように夢遊した私、家を失つた旅人のように夢遊した私、故郷に帰ってみれば、家もやしきも実は昔のままです。

土地神、こちらへ。あなたにお礼を申し上げます。（副浄）どうも恐れ入ります。（旦が拜礼し、副浄が受ける介）（旦）〔前腔〕多年の護持に感謝します、多年の護持に感謝します。あなたは私の屍体を腐敗から守り、その上、あてなくさまよう私の靈魂も保護していただきました。（副浄）音楽や旗の用意がととのい、貴妃様の仙院へのお帰りを待つております。（旦が行こうとして、再び立ち止まる介）ちよつと待って、私は今、遷化して昇天しますが、後日陛下が還御されれば、きっと私の墓を改葬されるでしょう。その時のために、何か形見の品を証拠に置いておいた方がいいわ。

土地神、あなたは私の屍体を包んだしとねを、元通りに墓中に埋め戻して下さい。破いてはいけませんよ。(副浄) 承知しました。(土地神がしとねを手に取ると、しとねが宙を舞って退場する介) (副浄がそれを見る介) ややつ、不思議だ、不思議だ。あのしとねはひとひらの雲になって、とうとう空へ飛んでいったぞ。(旦が見る介) ああ、そうだわ。さつき私が復活した時、あのしとねにも金液がかかったので、しとねが靈力を持ったのだわ。錦のしとねは空飛ぶ雲となり、錦のしとねは空飛ぶ雲となり、しとねも仙人になったかのよう、私は一体何を後日の形見に残しておけばよいのやら。思うに、この黄金のかんざしと螺鈿の小箱は、いつもしつかり身に付けておかねばならず、その外には何もないわ。(考える介) おお、そうだ。私の胸にある錦の香囊は、むかし私が翠盤で舞った時に、陛下から賜った物、今それをはずして残しておきましょう。(香囊をはずして見つめる介をする) 香囊をはずして手に取り、香囊をはずして手に取る。(悲しむ介) 将来、陛下がこれをご覧になれば、二人の再会がかなわないよりかましでしょう。

(香囊をはずして副浄に渡す介) 土地神、この香囊を私の墓中に入れておいておくれ。(副浄が受け取る介) 承知致しました。(退場するそぶりをし、すぐに登場) 貴妃様に申し上げます。香囊を置いてまいりました。(雑が四名の仙女に扮し、音楽を鳴らし、旗を持って登場) (旦に会う介) 蓬萊山太真院の仙女が貴妃様にお目通り致します。どうか貴妃様には更衣のうえ、仙院へお帰りのほどを。(舞台裏で音楽を鳴らし、旦が仙衣に着替える介をする) (副浄) 私めがお見送りします。(旦) どうぞお戻りを。(副浄が退場し、仙女と旦が行く介) (旦)

〔単調風雲会〕(二江風) めざす瀛洲蓬萊山のおあたりを見やれば、仙雲がすつぱりと覆い、仙宮の金や碧の鏡が峰々の上に突き出ている。「駐雲飛」ああ、あの悠久の時間が流れる仙界でも、情愛はこの世と同じく永遠であり、真実の愛情は永久に朽ちないでしょう。今はこの黄金の釵と螺鈿の小箱とをしっかりとしまひ、このまま蓬萊山の山上へ参りましょう。(高所から退場) (仙女が続いて退場)

胸元の香囊から以前の香りは消えてしまったが、

玄宗との多情多感な思い出は忘れることができない。

あの蓬萊山は、ここからさほど遠くない所に見えるが、

張 祐
陸 龜蒙
李 商隱

そこは、遙かに続く天上世界と人間世界のあわいにあるのだ。

曹 唐

注

- (1) 原文は「残月暁風誰問」。「三体詩 冒頭の宋・杜常「華清宮」詩に、「暁風残月入華清」と。
- (2) 原文は「此心耿耿」。「楚辭 遠遊に「夜耿耿而不寐兮」と。
- (3) 原文は「太陰鍊形之術」。遷化した死体が消滅する屍解や、或いは復活する方術を示したものの。「雲笈七籤」卷八十六所収「太陰鍊形」に「真誥」を引用してその方法を述べ、また「太平広記」卷三十三「申元之」に「仙伝拾遺」を引用してその実例を述べる。
- (4) 原文は「往郊西道北」。楊貴妃の埋葬場所を示す。「楊太真外伝」卷下に「瘞於西郭之外一里許道北坎下。」と。

第三十八齣 弾詞

(末が白いひげと古びた衣服・帽子をつけ、琵琶をかかえて登場)「漁陽に攻め太鼓の音が響いて安祿山が拳兵すると、もぬけとなった宮中はたちまち蔓草が伸び放題となった。その中に、わしのような白髪頭の遺民が生き残り、亡国の恨みを音曲に託して、興亡の顛末を物語る。」わしは李龜年、昔宮内の楽人として梨園に仕え、天子の厚いご恩寵を受けた。朝元閣で霓裳羽衣曲を演習した後、陛下に奏上したところ、陛下は大変ご満悦で、貴妃様とともに、それぞれ数万銭を下らぬご褒美をいただいたものだ。ところが思いがけぬことに、安祿山が謀反を起し、長安が陥落したため、陛下は西蜀へ巡幸され、万民は離散することになった。わしら梨園の仲間達もみな散り散りばらばらになり、それぞれ都から逃げ出した。わしはこの江南地方にやって来たが、路銀も全て使い果たしたので、やむなくこの琵琶一つ抱え、歌を唱って糊口を凌いでいる。今日は南京青溪の鸞峯寺の縁

日、参拝者も多いことだろう。では、そこに行つて歌を売ることじしよう。(歎く介) ああ、思えば昔は宮中で清らかに唱つていた者が、今日は町中を門付けしながら歩くとは、何とも氣を腐らせることよ。(行く科)

「南呂一枝花」思わぬことに、私は晩年になって大乱と離散の憂き目に遭い、やむなく大道芸人として困窮の世過ぎをすることになった。旅路の辛苦で顔は真つ黒になり、衰えて白くなった髪や鬚を歎く。今や地の果てまで流浪して来て、この琵琶だけを残すのみである。私は恥を忍んで大通りを流したり、小路に入ったり。この私のどこに、あの筑を撃つて悲歌を唱つた秦の高漸離の氣概があるろう。かと言つて、あの簫を吹いて天下を乞食してまわつた伍子胥になれようか。

「梁州第七」思えば昔、私は美しい歌声で宮殿にお仕えし、玉の階段の前で新曲を陛下に捧げたものだ。天子の海より深いご恩は言い尽くせぬほど。冬は雪が止んだあとの驪山温泉への行幸に従い、夏は興慶池で蓮の花見の舟遊びに従い、秋には華清宮での月見の賞宴に侍り、春は花萼楼で満開の花見に侍つた。まことに、万物を潤す天子の深いご恩を受けているその時に、突然天地を揺るがす大災に遭遇し、天子は御車に乗つて劍門関を越えて四川へ蒙塵され、その途次、貴妃様は馬嵬坡で天生の美貌をあたら血で汚すことになった。江南に逃れた私は、老骨の身をもだえて、その不幸を慟哭する。今や哀れにも落魄したこの身、やむなく霓裳羽衣曲を門付けして歌つて歩いたところで、誰が昔のように拍手喝采してくれようか。六朝の陵園が草木に埋もれているのを空しく眺めつつ、やあら盛衰興亡の感にとらわれる。

(退場するそぶり)(小生が頭巾と便服の立立て登場)「咲き誇る花は旅人の目を奪い、春の風情に故郷を思つて心が痛む。霓裳羽衣曲を舞つた貴妃様の亡き後、音楽を解する人はいなくなつてしまつた。」私は李薔、以前長安におりましたが、安祿山の乱後にやつと故郷に帰つて来ました。かつて宮殿の塀の外から、霓裳羽衣のメロディーを盗み取るうとしましたが、まだその全部を得ておりません。聞けば、昨日一老人が琵琶を手に歌を唱つていたが、人はみなその技術の非凡さにまるで梨園の旧楽人のようだと云つてゐるとのこと。今日は鷲峯寺の節会、彼もきつとそこに居ると思うので、尋ねていってみよう。一路来てみれば、ほら、何と観客の多いこと。(外が

頭巾と便服を身に付け、副淨は帽子をかぶり、淨は長帽子と頭巾で頭を包んだ山西商人に扮し、丑が妓女に扮して登場)「外、美しい

花を求めて、この良き春にそぞろ歩き、(副浄) 寺の法会见物に來た我らは、参拝客の後を追って歩く。(浄) 姐さん、儂もあんたも、この絶好の行楽の時を逃さず、楽しく過ごそうよ。(丑) お客さん、では折よく、琵琶の新曲を聴きましよう。(小生が副浄の方を向く科) 旦那、どうも。ちょっと聞きますが、この姐さんの言う「琵琶の新曲」とは何のことですか。(副浄) 旦那は「存じないか、南京に新しく來た老人が琵琶の名手で、今日は鷺峯寺の法会に参上するというので、皆が聴きに行っているのです。(小生) 私も丁度その人を尋ねて行くところ。一緒にできますか？(衆) いいですとも。(一緒に行く科) 共に行き行き、更に行き行けば、早や鷺峯寺に着いた。さあ、寺の中に入ろう。(衆) 一緒に中に入る科(副浄) あちらに人の輪ができて、長椅子が四方を囲んでいる。きっとこれだろう。我々も揃って割り込み、坐つて聴くことにしよう。(皆が坐る科をする)(未が登場して皆に会う科) 皆さん、ようこそ。皆さんは私の曲を聴きに來られたのでしよう。どうかお掛けになって、間もなく唱いますので、どうぞよろしく。(衆) 待つてました。(未が琵琶を弾いて唱う科)

「転調貨郎児」夢幻のような國家の興亡は唱つても唱い尽くせず、「ご兩人の悲しみに堪えない故事を琵琶で弾き語りしても、とても弾き尽くせない。全てが物悲しく映る中、美しい江南の山河を眼にする。私はひたすら琵琶をかき鳴らしつつ、ご兩人の深い怨みを伝え、特に琵琶の調べに載せて哀愁を描き、ゆるゆると天寶時代の遺事を弾き語りましよう。

(外) 「天寶遺事」か、いい題目だ。(浄) 姐さん、彼の歌はどんな曲調なんでしょう？ 我らの故郷の山西調なんでしょうか？(丑) そんなところでしよう。(小生) ご老人、天寶時代の遺事が、どうして一回で語り尽くせましよう。どうかまず、楊貴妃様が当時どのように宮中に入ったかを語って聴かせて下さい。(未が琵琶を弾いて唱う科)

「二転」思えばその当時、大唐の天下太平をことほぎ、天下の美人を訪ね求め、天子のお相手にふさわしい美女を探しておりました。ここに、弘農の名族楊氏に生まれ、深窓で大切に育てられた玉のような佳人がおりました。かの君王は一目でこの上なく気に入られ、螺鈿の小箱や黄金の釵を結納としてお与えになり、彼女を昭陽宮第一の寵妃として選抜なさいました。

(丑) 貴妃様はどんなご様子でしたか？ (浄) きつとこの姐さんのようにきれいだったんでしよう？ (副浄) まあ唱うのを聴いてみようよ。(末が琵琶を弾いて唱う科)

〔三転〕 かの貴妃様は、生まれながら仙女のようなお美しさ、おしとやかさ、あでやかさは表現もできません。まことに赤い面の頬は美しい花にも勝り、しなやかな腰は柳以上、かの王昭君よりもあでやかで、西施よりも美しい。まるで観音様が雲海から飛来したかのようであり、あたかも嫦娥がひそかに月世界を脱け出したかのよう。加えて彼女は情愛こまやかで、ほんのり酔った姿はなまめかしく、お休みの様子はひっそりと夢見る風情。どんな優れた絵師でも、あのような様々な艶姿は描けそうにありません。

(副浄が笑う科) この老人の語る楊貴妃の美しさがこんなに生き生き表現されるのを聴いていると、まるで老人がじかに見たかのようにですが、おおかたは空言なんでしょう？ (浄) 歌がうまけりやよいので、うそかどうかは関係ないの。その時、皇帝は彼女をどのように扱われたんですか？ 早く唱って聴かせて下さいよ。(末が琵琶を弾いて唱う科)

〔四転〕 君王は貴妃様を世に二つとない真珠のように寵愛され、一日中掌中の玉を愛いとしんでおられました。その様は、お化粧をしたばかりの漢の趙飛燕以上であり、お二人はまことに玉楼に巣くわくう翡翠かみせみか、金殿にこもった鴛鴦わしどりかといったところ、朝な夕な仲睦まじく寄り添っておられました。あの聡明な天子がとろけてめろめるになり、貴妃様のことが片時も心中から離れなかつたために、朝政はおろそかになり、情愛の虜となつてしまいました。その風流のさまは万言を費やしても書き尽くせない程です。お二人は行くにも一緒、坐るも一緒、寝台にびったり寄り添われ、月の夜、花の朝の風情を共に楽しめました。

(浄が卒倒する科) ああ、とてもすばらしい。わしやこれを聴いて、火にあつた雪だるまになつちやつたよ。(丑が支える科) というところけちやつたさ。(衆が笑う科) (小生) 聞けば、当時宮中にあつた霓裳羽衣曲は、陛下御製とも、貴妃様作とも言われていますが、ご老人は事情をご存じでしょう？ どうかそれを唱って聴かせて下さい。(末が琵琶を弾いて唱う科)

〔五転〕 その頃、貴妃様は荷亭にあつて音曲を細かに調べられ、新曲の霓裳羽衣曲を作られました。昼間ずっと、

自ら宮女に教え、白い手を伸ばして檀板を打ち、楽譜の一字一字はどれも貴妃様の赤い唇、白い歯で口にされたのです。それはまるで一連の真珠が立てる音のように見事に調和し、それはまるで鶯や燕が鳴き交うようになめらかに響き、それはまるで泉の水が花咲く溪谷をせせらぎ流れるかのよう、それはまるで満月の下で清らかに梵唄を朗唱するかのよう、それはまるで緞嶺の鶴が高く寒い空に鳴き立てるかのよう、それはまるで天空の仙女の珮玉が夜に音を立てるかのようでした。新曲の披露では、召集された梨園の弟子や教坊の楽人が、翠盤で踊る貴妃様を取り囲み、君王はそれを微笑み見られていました。

(小生) 天上の音楽がまだ耳にあるかのようで、本当にすばらしい描写です。(外が歎く科) ああ、実に嘆かわしいのは時の天子が貴妃様を寵愛し、朝な夕な歡樂に耽り、ために漁陽の安祿山の乱を招いてしまったこと。口にすれば心痛むことよ。(小生) ご老人、貴妃様への怨みごとは無しですよ。その当時、天子が誤って安祿山を辺境の將軍に任命し、政權を奸臣に委ねたばかりに、国家はひっくり返り、天下が揺らぎました。もし賢臣の姚崇、宋璟が健在であつたなら、どうしてこんなことになつたでしょう。(外) それもそうだ。(末) さてと、漁陽の兵乱といえ、まこと天地がひっくり返つた大乱で、見るも無残な痛恨事でした。皆さんがお嫌でなければ、私が続けてゆるゆると弾き語りをしましょう。(衆) ぜひ聞きたい。(末が琵琶を弾いて唱ふ科)

〔六転〕 あたかも貴妃が霓裳羽衣曲をひらひらと舞っている折しも、突然、漁陽からドンドンと陣太鼓の音が響きました。至急便でわらわらと辺境の急を告げる文書がもたらされ、慌てて宮中は上や下への大騒ぎ、手の施しようもありません。人々はただ、がやがやざわざと驚き慌て、あたふたと押し合いへし合いしながら、都の延秋門から西に逃れます。御車の後には、あでやかできらびやかな貴妃様を帯同しています。更に見れば、びっしりと取り囲んだ兵どもが、凶暴凶悪な声で、がやがやこうこうと辺り一面にわめき立て、無理に迫つて、仲睦まじいほやほやあつあつの帝王夫婦の仲を引き裂きました。こうして、瞬く間に絶世の美人の悲惨な絶命図を描くことになつたのです。

(外と副浄が共に歎く科) (小生が涙する科) ああ、天生の美貌がこんな無残な目に遭うなんて、本当に可哀想に。(浄が笑う科) これは語り物なのに、お前さんはどうして真に受けて涙を流すんだい？ (丑) その貴妃様は殺されて、

どこに埋葬したのですか？（末が琵琶を弾いて唱う科）

〔七転〕 荒れ果てた馬嵬の馱舎の、うら寂しい仏堂が傾いているところで、絶世の美女が君王のために絶命し、永遠の遺恨が絹のハンカチに血となって滴る。立木の半分に薄命の美人の墓碑を書き、断腸の思いで美人の墓にひと掬いの土を盛る。今や荒涼たる馬嵬の野を通り過ぎる人もなく、広大な天が下、誰が梨の花のごとくはかなく散った美女を弔いましょう。哀れなことに、深い怨みを抱いた孤独の靈魂は、望帝を求めてむせび泣くホトトギスのように、この月夜に悲しげに泣いているのです。

〔外〕 長安の兵乱が収まった後の様子はどうでしたか？（末） おう、皆さん。あの麗しい花の都長安は、安祿山軍に陥ちた後、見るも無残な状況になりました。では私の弾き語りをもう一つ。（琵琶を弾いて唱う科）

〔八転〕 御軍が西蜀へ巡幸されてから、長安は乱兵のなすがまま。百官は宮殿に参内するものもなく、繁栄もにわかにかに消え、消え失せました。後宮の扉には蜘蛛が巣をかけ、寝台の傍らでは昼間から狐狸が嘯くほど。ふくろうは鳴き、よもぎは伸び放題、野鹿は駆け回り、御苑の柳や花も半ば枯れましたが、誰が掃除し、掃除しましょう。鼈甲作りの梁には燕が巣をかけて糞泥を落とし、片割れ月が夕黄昏に照り映えるばかり。うら寂しい風情を歎くなか、何ともひどい臭いが漂う。ひどい臭いが漂うのは、宮殿の階下にうずたかく積もった馬糞のせい。

〔浄〕 へつ、長いこと聴いて腹が減ったわい。姐さん、一緒に焼酎を飲み、蒜包兎にんにくポテトでも食いに行こうか。（浄が腰から錢をほどいて末に与え、丑とぶさげながら退場）〔外〕 日も暮れた。わしらも行くぞ。（外が銀錢を払う科）お足はここに。（末）有り難うございます。（外）はからずも弾き語りされた開元天宝の興亡の怨み節、（副浄）それを傍らで聴く人も涙を誘われる。（外と共に退場）〔小生〕ご老人、お聴きたああなたのこの琵琶の腕前は、並のものではありません。どなたから伝授されたのか、詳しくお聞かせ下さい。（末）

〔九転〕 私はこの琵琶をもって、曾て開元皇帝にお仕えした者、当時のことを再び言えば、心は痛み、涙がこぼれます。（小生）とおっしゃると、きつと梨園の楽人ですね。（末）私も曾ては梨園の名簿に名を連ね、おそば近く沈香亭の牡丹花の下に伺候し、華清宮の宴席にお供したこともございます。（小生）まさか賀さんなのでは？（末）私は賀懐智ではありません。（小生）もしや黄旛綽さんでは？（末）黄旛綽は私より年配です。（小生）それなら、きつ

と雷海青さんでしよう？（末）私は琵琶を弾きますが、雷姓ではありません。彼なら、逆賊を罵倒して、とつくの昔に身は死して、名声が伝わっています。（小生）そんなら、きつと馬仙期さんだ。（末）私は方響の名手馬仙期でもありません。それら旧知の人のことは言わないようにしましょう。（小生）どうしてここまで来たのですか？（末）私はただ兵乱で国家が滅んだため、それゆえに単身で流浪して江南へ来たのです。（小生）結局、ご老人はどなたなんでしょうか？（末）あなた様はしきりに私は誰だとおっしゃるが、私は昔の楽人で、名は龜年、姓は李というものです。

（小生が拱手して挨拶する科）やつ、何と李先生でしたが、失敬しました。（末）あなた様のご尊名は？ どうして私めをご存知で？（小生）私は李と申し、名は譽といいます。（末）まさかあの鉄笛の名人李さんでは？（小生）その通りです。（末）お会いできて幸いです、幸いです。（拱手して挨拶する科）（小生）ご老君にお尋ねします。ご老君はあの霓裳羽衣曲の曲譜をまだ覚えておいででしょうか。（末）まだ覚えていますが、あなたはどのようにしてそれを？（小生）実を申しますと、小生は根つからの音楽好きで、以前都長安に旅したとき、老君が朝元閣で霓裳羽衣曲を練習していたのを、小生は宮殿の壁に寄りかかって細かに盗み聞きを致しました。鉄笛で曲の数節を密かに聞き取って曲譜に写しましたが、全部ではありません。それでいろいろ探しましたが、誰も曲を知りませんでした。今日は幸いにご老君にお会いできましたので、お教えいただけませんか？（末）知音の友に出会った以上、どうして私の拙い技を惜しむことがありませんか？（小生）それはとても有り難いことです。ではお尋ねしますが、ご老君のお住まいはどこですか。（末）落ちぶれて流浪する身、私に身を寄せる所はありません。（小生）では私のところに暫くお出でいただき、詳しく曲譜を教えていただくのはどうでしょうか？

（末）それは好都合です。
 「鮫尾」私はまるで、変事に驚いたかささぎが樹のまわりを廻って外に飛び立ったように、長安を後にして天下を流浪して来ましたが、誰が予想したでしょう、年を取った燕が古巢を尋ねて立派な屋敷に入るように、ここで旧知に出会って住処を提供してもらおうことになるうとは。今日のこの日は、音楽を知る知己同士が出会えて本当に嬉しい。この出会いこそは誠にすばらしいものであり、このように二人が意気投合することは誠に痛快です。李さん、

あなたにじつくり、この千年も伝わる名曲霓裳羽衣曲をお教えしましょう。

(末) 桃や柳の茂る小径をいくつも越え、

(小生) 少しばかり車を廻らせてツタの庵に住む隠者を訪ねる。

(末) 今日は音楽を知る友がじつと私の歌を聴いてくれた。

(小生) この江南では、どこも霓裳羽衣歌を聞かない所は無い。

張 籍
白 居易
劉 禹錫
顧 況

注

(1) 鷲峯(峰)寺……南京の名刹。城内の青溪地にある。梁の江総の故宅であつたものを、唐の乾元中に昇州刺史顔真卿が放生池を置いた。明の天順間に賜額寺となり、鷲峰寺と称した。明・葛寅亮『金陵梵刹志』卷二十一、青溪鷲峰寺に關連詩文を輯録する。

(2) 原文は「半科樹是薄命碑碣」……馬嵬で殺された楊貴妃の靈魂が徘徊する第二十七齣「冥追」に、「呀、這樹上写的有字、待我看来。(作念科) 貴妃娘娘葬此。(作悲科) 原来把我就埋在此处了」とある。

(3) 原文は「野鹿兒乱跑」。宋・張俞「驢山記」(「青瑣高議」前集卷六所収)に、「一日、宮妃奏帝云、花已為鹿銜去、逐出宮牆不見。」と。

(4) 原文は「鷲鳥繞樹」。鳥については、出典と思われる曹操「短歌行」に「名月星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可依」とあることから、「烏鵲」(かきささぎ)と解釈する。